

171センチ、65キロ。チーム内では最も小柄な選手の1人だが、豊富な運動量と軽快な身のこなしで、ピッチ狭しと駆け回る。「周りには味方が10人いるんですよ。コンビを機能させ、前線を突破、一気に有利な状況を作り出すのが自分の役割」。

2年目でレギュラーに定着する一方、副キャプテンの重責も背負うことになった

横浜F・マリノスの兵藤慎剛選手(24)にサッカー人生を聞いた。

周りの10人と連携し サッカーも「支えあい」基本



横浜F・マリノス 兵藤 慎剛 しんこう 選手に聞く



子供のころからサッカー少年だったのですね。

兵藤 サッカーも好きだったけど、野球も好きだった。スイミングスクールにも通っていたから、スポーツ全般が好きだったのですね。

最終的にサッカーを選んだのは、小学校2年のときJリーグがスタートし、友だちの多くが地域のサッカーチームに入部したので、自然と

その影響を受けたからです。

地元・長崎県の私立海星中学へ。進学校ではあったが、サッカー強化に踏み出したところで、有力選手を集め始めていた。1年からレギュラーの座を占め、3年の時は県大会優勝、九州大会では準優勝、全国大会でもベスト16に進む原動力に。九州選抜のメンバーにも選ばれ、「海星の兵藤」はサッカー仲間ではちょっとは知られた存在となっていた。

高校は長崎の名門・国見でした

ね。同期生に平山相太(現東京FC)や中村北斗(同)らそうそうたるメンバーがそろい、全日本ユース選手権、インターハイ、高校選手権の三大タイトルをすべて獲得しました。

兵藤 平山選手をはじめ、九州選抜のメンバーの多くが国見に進学するという話を聞き、海星に残って国見を倒したい気持ちもありましたが、レベルの高い選手がそろったチームで全国優勝したいという思いの方が強く、国見を選択しました。

アスリートにとって環境は大切に

と生きていたのに、1年間は補欠。レベルの高い先輩がいたので当然なのですが、天狗の鼻を折られました。

また、大学2年次のワールドユースでは、(世界で)もっと通用すると思っていたのに、結果を出せなかった。世界との差を痛感し、落ち込みました。モットーである「サッカーは楽しく」が、ちっとも楽しくなくなりました。

忘れられない試合が2つある。高校2年のとき、3連覇のかかった選手権決勝で市立船橋に0-1



©横浜マリノス株式会社

で敗れた試合。もう一つは大学3年のときのインカレ決勝で駒沢に1-6で敗れた試合。惜敗と大敗。内容はまったく異なるがショックは大きく、しばらくは気持ちの切り替えが出来なかったという。しかし、高校時代も大学時代も、その翌年は優勝した。身体の大きな選手を前にすると、「負けてなるか」と奮い立つほど、負けん気は人一倍強い。忘れられない試合のあとも、持ち前の負けん気が頭をもたげたから雪辱を果たしたのだろう。挫折後、「楽し

くなくなったサッカー」を再び楽しめるようになったのも、その負けん気があったからに違いない。

インカレ優勝にMVPを引っぱってのマリノス入団でしたが、チームは今ひとつ波に乗り切れません。歴史と伝統あるチームに活を入れてください。

兵藤 選手1人ひとりの能力は高く、Jリーグ中に甘んじるチームではありません。一丸となって戦い、結果を出さなければ、と思いません。3大タイトル(ナビスコ、天皇杯、Jリーグ)の1つを制覇することと、ACL出場権確保、が当面の目標です。

個人的な目標はどうですか。

兵藤 1年を通してスタメンの座を守る。また、身体は小さいが、周りには味方が10人いるので、持ち前のスピードと周囲との連携で相手ディフェンスを突破し、アシストやゴールにからみたい。数字的にはJリーグで5点、3大タイトルで10点挙げる。また、副キャプテンとして、若手の見本となるだけでなく、ベテランと若手をつなぐパイプ役を務めたい。重荷ではなく、貴重な経験を積ませてもらっている、と考えている。

横浜F・マリノスは1991年、Jリーグ創設と同時に加盟(当時は横浜マリノス)したサッカー

界の名門中の名門。92年に天皇杯、01年にナビスコ杯を制覇したほか、Jリーグは95、03、04年の3回王者に輝いているが、その後は低迷。いずれのタイトルからも遠ざかり、名門復活にかけるファンの期待は大きい。

ゲームの中では、兵藤さんの周囲に10人の味方がいる、と話されました。選手全員で協調し合いながらゲームを組み立てていくことだと理解していますが、支え、支えられる共同募金の精神と一緒にしたいと思います。

兵藤 まったくその通りです。一人でプレーするのではなく、仲間を信じあい、協力しあうことがチームワークです。サッカーを始めて15年になりますが、その間忍耐力、協調性の大切さを学びました。それは社会で生きていく上でも大切です。子供や高齢者、障害者たちは私たちの仲間です。ハンディはありませんが、私たちがちょっとアシストすれば、協調すれば共に生きていけるのです。私もサッカー界では最も小柄な選手で、体格的ハンディはありますが、仲間を支えられてプレーをしています。共同募金の精神はサッカーの競技につながっています。

聞き手 大谷 義輝 (神奈川県共同募金会常務理事)

